



1938年(昭13)10月下旬、海軍水路部、兵庫湾頭に気象観測所設置。翌1939年8月18日午前4時火山爆発に伴い壊滅。1944年6月21日、海軍気象部は気象班を派遣、明治浦(雄浜)で終戦時まで観測通報実施、1945年10月28日全員引揚げる。これらの資料の一切は今はない。惜しいことである。

1946年2月18日、7月25日の2度、中央气象台調査団は東京出港、現地業務の準備踏査を行った。翌年5月15日凌風丸は、設営隊を乗せて芝浦出港、6月1日から旧海軍守備隊電探室にて観測通報開始、鉄骨バラック倉庫に起居しつつ全員協力、無人の火山島に新しい歴史を創り始めた。場所は現在とほぼ同地点、月夜山の西側斜面、海面高度約80mの地点である。(▲印)

1948年10月、木造新庁舎落成。1955年1月本建築庁舎宿舎落成移転で7年にして漸く外形ひととおり整う。

現在の業務：8回地上観測及び通報。レーウィンゾンデ(今年から通年、1947年から夏期のみだった)。地震計(簡単及び石本式微動計)。地磁気偏角計、降水の放射能測定、沿岸海洋観測(5日に1回)。10日に1回の火山観測(地温、噴気温も測る)など。

据置電池2基、充電は12馬力-6KW直流150Vエンジン使用。他に送信機、点燈、非常用として25馬力-15KVA、7.5馬力-3KVA、6馬力-3KVAの3台のエンジン。充電はおおむね4~5日に1回づつ。

送信機は、日本無線250WとTM200Wの2台。船上で沖合から眺める鳥島は、ひたすら凄愴たる活火山島である。島は、外輪山の旭山(392m)月夜山(374m)と1939年噴火でできた中央口丘の硫黄山(403m)、その南隣の子持山(358m)で構成される2重式複成層火山である。外輪山は外斜面の傾斜約30度、海岸は50~60度の絶壁。硫黄山は切頭円すい状火山で、外斜面の傾斜約30度、山頂に円形火口(内壁の傾斜約50度)を持つ。図は、地理調査所の航空写真並びに測候所の多角及び平板測量によって作った地形図で、現行の5万分の1図や海図とはその様相がすこぶる異なっている。島の北部2つの扇形は1939年噴火で流出した溶岩流、そのまん中の昔日の良港兵庫湾も今はその名を残すのみで、水路部の設けたという水準基準線はいくら探しても

見当たらない。

今のところ、火山性微動、地磁気偏角、噴気地温等に別段顕著な変動はみられられないが、この島に住み働く者にとっては過去の噴火記録は常に念頭にあって去らない。

所長1、観測(高層は別)7、無線6、動力2、定夫2の所員は

6カ月在島が原則。但し中央气象台離島課のとりわけ観測者の定員不足から在京僅か2~3カ月に再びマーカス島か此処へ船出しなければならない、というビタミンと都塵とはエンの遠い暮しがつづく。皆が内地と呼ぶそこからの補給船は3カ月ごとにしか訪れない。

水は天水使用。全容水量は800石ほど。夏期は入浴不能。今よりはるかに貯水量の少ない頃、その夏期に仕事の合間を連日フルに使って電池室や水槽の建築、風力塔やアンテナ塔の建立等々に寧日なく所員も働いた苦しい時期がある。こういう歴史は華々しく記録されない。

港がないから傳馬船がよろよろ出入りできる島の西側の南に開いた口から大小の岩石がごろごろする足場の極端に悪い所へ荷揚げして、これを7 magari 8折れる急傾斜を八丈島の人夫衆に立ちまじって所員も担ぎあげていたのだが、このほど海岸から庁舎までの索動ケージが今頃漸くでき上って大変能率的となった。

病気は大敵。東京湾に常に1~2隻はいた定点観測船はイザという時の安心感の支えとなっていたのだが――。

初冬訪れる胡鳥(オーストンウミツバメ)は晩冬から初春に産卵育児して初夏までには島を去る。島の南側斜面に住むアホウドリの群の中には絶滅と思われていた世界的珍鳥の「アホウドリ」もまじっていた。(樋口三郎)

